電子オルガン三題噺

『作曲家の為のエレクトーンマニュアル』による作品展

水野みか子

・電子オルガン
・運動
・グラフィクス

ELX-1m：安井正規
映像：阪本裕文

山田 香

・電子オルガン
・箏
・アリア

ELX-1m：内海源太
箏：石井まなみ

宮木 朝子

・電子オルガン
・(身体)
・エレクトロニカ

ELX-1m：平沼有梨
Electric guitar：及川潤耶

米本 実

・電子オルガン
・発振器
・ノイズ

ELX-1m：赤塚博美

三輪 眞弘

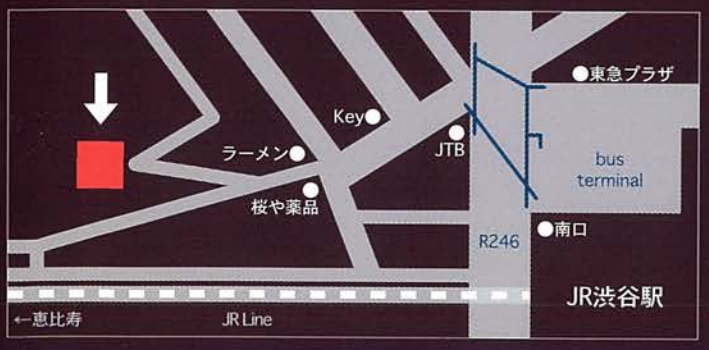
・電子オルガン
・伝統芸能
・コンピュータ

ELX-1m：岩崎孝昭
桑原哲章

日本電子音楽協会 第11回演奏会

全日本電子楽器教育研究会第39回ワークショップ

日時：2004年9月26日（日）
開場：16時　開演：16時30分
料金：3,500円
場所：エレクトーンシティ渋谷 メインスタジオ
03-3476-4700



主催：日本電子音楽協会
共催：全日本電子楽器教育研究会
協賛：ヤマハエレクトーンシティ渋谷

お問い合わせ：
日本電子音楽協会（岩崎）04-2923-6450
全日本電子楽器教育研究会事務局 03-3476-4704

電子オルガン
三題噺

『作曲家の為のエレクトーンマニュアル』による作品展

日本電子音楽協会第11回演奏会
全日本電子楽器教育研究会第39回ワークショップ

2004.9.26.
Sun.
16:30 start
エレクトーンシティ渋谷
メインスタジオ

主催：日本電子音楽協会
共催：全日本電子楽器教育研究会
協賛：ヤマハエレクトーンシティ渋谷

PROGRAM

第1部　ワークショップ
『作曲家の為のエレクトーンマニュアル』実践報告

---------- 休憩(15分) ----------

第2部　コンサート

1 水野みか子　電子オルガン・運動・グラフィクス
『ケルヒ』
ELX-1m:安井正規
映像:阪本裕文
音響調整:岡野憲右

2 山田香　電子オルガン・箏曲・アリア
『和泉式部のアリア「こころみに雨も降らなん」(和泉式部日記より)』
ELX-1m:内海源太
箏:石井まなみ
ソプラノ:大隅智佳子

---------- 休憩(10分) ----------

3 米本実　電子オルガン・発振器・ノイズ
『回路～電気の通り道～No. I』
ELX-1m:赤塚博美
モニターカメラ:松原悠大

4 三輪眞弘　電子オルガン・伝統芸能・コンピュータ
『オルガンのための「四指繰講(ししくりこう)」』
ELX-1m:岩崎孝昭
桑原哲章

5 宮木朝子　電子オルガン・(身体)・エレクトロニカ
『Orfeu mix
- for electronic organ ,electric guitar and electronic sound』
ELX-1m:平沼有梨
Electric guitar:及川潤耶

ケルヒ

タイトルの「ケルヒ」は、植物の花弁を囲む萼(ガク)を意味する。萼は緑色で葉っぱのように見えることもあれば、花びらと似た美しい色彩や模様を持つ場合もある。

演奏用インターフェイスとして最高級の機能を持つエレクトーンという楽器を、プレー用にだけでなく作品の構造を編み上げるために使ってみた。エレクトーンの音とコンピュータのサウンド・ファイル、演奏情報によって制御される映像、そして視聴覚素材による音楽作品の作曲。こうしたコンテンツが花そのものだとすれば、萼としてのシステムや音色作り込みは、花を守り引き立てるために不可欠の枠組みだ。今回の複雑な作業と演奏に御協力いただいた演奏者の安井さんに心より感謝申し上げます。(水野)

この映像のコンセプトはインターレース方式のテレビモニターの走査特性にある。
インターレース方式のテレビモニターは1フレームの画像を奇数フィールド/偶数フィールドの2回に分けて走査している。ということは1本の走査線に相当する太さの線のイメージが配置された縞模様の画像は、奇数フィールド/偶数フィールドの走査の際に激しい変容を引き起こすことになる。この縞模様は普段意識されることのない映像メディアの構造と走査線の存在を前景化させるだろう。(阪本)

水野みか子
東京大学文学部美学芸術学科、愛知県立芸術大学音楽学部・同研究科を各々卒業・修了。
作曲と音楽学の分野で活動を展開する。
主要作品として、管弦楽作品《Showering Memory》《穀物の緑の波》、琵琶と管弦楽のための《光の扉へ2》、室内楽作品《ピアノ三重奏曲DAN》、《能管とパイプオルガンのためのTimePrism》、ライヴ・エレクトロニクス作品《diglvox》(sop.+comp.)、《天空プロジェクト》(voice ensemble+ electronics)などがあり、オーストリア(Mozarteum)、フランス(Ircam, Bourges, CERPS)、ドイツ(GEDOK)、ハンガリー(Hungarian Radio)等海外でも上演・紹介されている。
現在、名古屋市立大学大学院芸術工学研究科助教授。工学博士。

安井正規 (ELX-1m)
国立音楽大学在学中よりプロとして活動。
全国スポレク祭、国民文化祭、世界キルトカーニバル、世界バトントワリング選手権大会など多数のイベントの開会式等にて式典音楽を制作・電子オルガン演奏。全国ネット「世界遺産」「スーパーサッカー」「ズームイン!朝」をはじめ首都圏ローカル「噂の!東京マガジン」など多数のTV番組のBGMをコンスタントに制作。特別記念番組「地上デジタル放送開始スタート!デジテレ」ではメイン・タイトル曲を制作。また電子オルガンによる合唱、コンチェルト、ミュージカル、演劇、バレエ、コンテンポラリーダンス等の伴奏や制作等、多方面で活躍。
学校音楽鑑賞会、教育講演会等、社会・地域貢献活動にも尽力。

阪本裕文 (映像)
京都精華大学大学院 芸術研究科デザイン専攻(映像分野)修士課程修了。
主に実験映画/ビデオアートの研究、制作を行なう。
研究としては映像学会関西支部第40回研究会にて「映像メディアの変遷と実験映像のラジカリズム」を発表、
制作としては近作「Still image with 240 stripes」が「EUROPEAN MEDIA ART FESTIVAL 2004(ドイツ)にて上映されている。
現在、名古屋市立大学大学院芸術工学研究科助手。

和泉式部のアリア「こころみに雨も降らなん」(和泉式部日記より)

以前よりこの和泉式部日記の美しさに魅かれていたので、電子オルガンと箏を使って形にしてみたいと思い作曲しました。(今回はその一部分です。)

この場面の登場人物は、和泉式部、敦道親王(帥宮)です。

———ある時、帥宮は和泉式部のもとに通う男が自分以外にもいると誤解し、しばらく式部のもとに通うことをやめていた。美しい月の夜、式部は帥宮を恋しく思い一首詠んで帥宮に届けた。それを見た帥宮はさっそく式部をおとずれたがすぐに帰ってしまうという。
そこで式部は

こころみに雨も降らなん宿過ぎて空行く月の影やとまると
「試しに雨でも降って欲しい。空を行く月のように、私(の家)を過ぎて行ってしまうあなた様がここにとどまってくれるかと。」
「こころみに雨でも降ってくれないかしら。私を通り過ぎて行ってしまう空の月のようなあなたが雨宿りに留まって下さるかもしれませんもの。」

と、詠みます。それを聞いた帥宮は……

山田香

東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。同大学院音楽研究科修了。
これまでに作曲を山本康雄、西岡龍彦、佐藤眞、南弘明、福士則夫の各氏に師事。
日本電子音楽協会 定期演奏会にて「電子音のための"merge"」が招待作品として紹介される。
最近の主な作品としてAvanceにて「月待ちて〜箏独奏のために」「雲ゐの月に〜箏独奏のために」、Composeumにて「雨の詩〜ソプラノとテノールとMax/MSPのために」を発表。混声合唱団ブルーメンクランツより委嘱を受け「かたつむりでんきちによる4つの詩」を発表、など。

内海源太(作編曲ELX-1m)

宮城県石巻市出身　国立音楽大学応用演奏学科卒業
国内外におけるソロ活動を軸に、ボーダレスかつ斬新な企画・構成をテーマに活動を繰り広げている。夏田昌和、土田英介等の作品をはじめとして、数多くの現代作品の初演や、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団への参加・出演(東京・サントリーホール)、Celloの古川展生やViolin奥村愛氏との共演の他、全国各地のイヴェント参加、コンサート活動や音楽制作など、その活動の幅を広げている。
繊細さと大胆さを兼ね備えた音楽表現、類いまれなる超絶技巧は、聴く者を魅了してやまない。
OfficialWebSite　http://www.q-ism.com/gentaweb/

石井まなみ(箏)

東京芸術大学大学院音楽研究科修了。安藤政輝に師事。
宮城会コンクール一般部第2位。NHKテレビ、NHK-FM、FM東京に出演。NHK邦楽オーディション合格。
ヨーロッパ5ケ国、国際交流基金派遣による北・中米諸国、独日協会の依頼によるドイツ、日中国交正常化30周年記念オペラ〈ちゃんちき〉中国北京公演における演奏等。
NHK邦楽技能者育成会修了。生涯学習音楽指導員B級。サンシャインシティ文化センター講師。

大隅智佳子(ソプラノ)

神奈川県出身。東京芸術大学音楽学部声楽科首席卒業。
大学在学中に安宅賞、卒業時に松田トシ賞、アカンサス音楽賞受賞。首席に伴い、皇居内桃華楽堂における宮内庁主催御前演奏会に出演。東京芸術大学同声会主催新人演奏会出演、同声会賞受賞。芸大定期新卒業生紹介演奏会、芸大"うた"シリーズなどの演奏会に出演の他、モーツァルト「レクイエム」、ハイドン「スタバト・マーテル」ヴェルディ「聖歌四編」などのソリストを務め、また、オペラでは芸大定期「フィガロの結婚」伯爵夫人役、横浜市民オペラ「カルメン」(日本語)ミカエラ役、「運命の力」レオノーラ(抜粋)などを演じる。他、リサイタルなどの自主的な演奏活動の傍らシューベルトのオペラ本邦初演企画などの制作にも積極的に取り組む。
今年10月の芸大定期オペラにてモーツァルト作曲「コジ・ファン・トュッテ」にてフィオルディリージ役で出演予定。
11月には芸大にてドヴォルジャーク「レクイエム」のソプラノ・ソロとして出演予定。
現在、同大学院修士課程オペラ科在籍。並びに二期会プロフェッショナルコース在籍。
これまでに声楽を辻宥子、嶺貞子、直野資に、ロシア歌曲を山下健二の各氏に師事。

回路〜電気の通り道〜No. I

2003年夏の全日電研のシンポジウムで、松尾祐孝先生の発表のお手伝いをすることになり、当日の会場で久々にエレクトーンの演奏に触れて、エレクトーンに対する認識が一変しました。演奏者の表現力さえあれば、あらゆる音楽が表現出来る電子楽器に進化していたからです。その年の秋、大学の文化祭で、岩崎真先生から「電子オルガンに興味ない?」と尋ねられ、「あります」と答えた私。更に「次回の演奏会で作品を出してみない?」と聞かれ、私はまともな曲など作れませんので....と断ろうとしましたが、「あなたにそんなことは望んでいない!」という言葉に、参加を決意しました。

私は、10年程前から、プリミティブな仕組みで動作する電気楽器の制作を、また同時に電子楽器の歴史を調べ始めました。電子楽器というものを見つめ直したかったからです。その中で得られた最も重要なことは、電気エネルギーの等質性ということでした。電気は、電圧、電流、周波数などのパラメーターが同じであれば、全て互換性があるということです。そのことに気付いたときから、私には、この世界全てが巨大な電子楽器に見え始めました。

今回の作品は、大きく3つの要素で組み立てられています。

1.MIDI信号の音を聞く
MIDIとは、電子楽器間の通信信号です。エレクトーンのMIDI端子から、他の電子楽器のMIDI端子にケーブルを接続した場合、エレクトーンの鍵盤から、その電子楽器を弾くことが出来ます。本来の用途は、そのようなものですが、何とそのケーブルをMIDI端子ではなく、スピーカーに直接つなぎます。つまり電子楽器同士をつなぐ血管とも言えるMIDI信号そのものを聞こうという試みです。鍵盤のアフタータッチやペダル、テンポのダイアルを回すことにより、音が微妙に変化するのが聞き取れると思います。

2.自作発振器をエレクトーンでコントロール
ステージ上で、電子部品をハンダ付けして、リアルタイムで発振器を組み立てます。今度はエレクトーンから送られるMIDI信号を、2つの変換器で別の信号にして、組み立てた発振器につなげてコントロールします。21世紀の楽器エレクトーンと、半世紀以上前のプリミティブな発振器の共演を、お楽しみください。

3.エレクトーンからの電磁波
演奏者に携帯ラジオを渡します。エレクトーンから発せられる電磁波が、ラジオに混信することによって、独特なノイズを聞くことが出来ます。エレクトーンへ近付ける場所によって音が変化します。

1.〜3.の要素を組み合せ、エフェクト処理をしたり、またエレクトーン自体の音も加えて演奏していきます。エレクトーンの中から発せられるあるゆる電気信号を、音や制御信号に変換し、演奏者の力で音楽となっていくプロセスを表現するというのがテーマです。またエレクトーンのデジタル・キーボードとしてのパフォーマンス性(©松尾祐孝)も提示したいと思いました。パフォーマンス色の強い私の作品は、自作自演することが多いのですが今回は素晴らしいエレクトーン演奏家である、赤塚博美さんにお願いしました。リハーサルを行なった際、私自身とそして私の組んだシステムと対話しながら、音楽を作り出していく赤塚さんの素晴らしい感性とお人柄にとても感動しました。今回の作品に、音楽的生命を吹込んで頂いた赤塚さんに深く感謝しています。有難うございました!

米本実

1969年東京生まれ。1996年日本大学芸術学部大学院芸術学研究科音楽芸術専攻修士課程修了。
音楽とテクノロジーの関わりをテーマに、自作の電気楽器を用いた電子音楽の作曲、演劇・舞踏・ダンス公演のサウンドトラックの制作、パフォーマンス、サウンド・インスタレーションを行なっている。
1995年ルイジ・ルッソロ国際コンクール入選。
日本電子音楽協会会員。洗足学園音楽大学音楽音響デザインコース非常勤講師。

赤塚博美(ELX-1m)

第11回、第13回インターナショナルエレクトーンコンクールグランプリ大会入賞、及び川上特別賞受賞。
'78年、'79年ヤマハシニアコンサートにおいて、エレクトーンGX-1と管楽器のためのエッセイ、"大地をたたえる歌"及び"子供のためのシンフォニエッタ"の作曲および演奏。'87年よりオペラ伴奏者としての活動を開始、ミラノスカラ座のG・ピサーニ氏に学び数々のコンサートで共演。その後活動範囲は国内にとどまらず、ヨーロッパ、アメリカにも及ぶ。現代曲の初演、コンチェルトの共演などでエレクトーン演奏の第一人者として国内外を問わず活躍中。5年間の滞米中には、全米各地にてコンサート、アレンジ活動など精力的に行い、その中でもカーネギーホールにおける演奏では好評を博す。洗足学園音楽大学講師。

松原悠大(モニターカメラ)

洗足学園音楽大学音楽音響デザインコース3年在籍中。

オルガンのための「四指繰講(ししくりこう)」

オルガンのための「四指繰り講」あるいは「指繰り講」
　現在知られるもっとも古いオルガンの原型として「笛ハープ」と呼ばれる楽器が伝えられている。ハープと呼ばれながら、竪琴とは発音原理がまったく異なるものだが、「ハープのように」演奏することからこのように呼ばれるようになったという。これは順序正しく並べられた、弦ではなく、木片(鍵盤)を指で押さえるだけで音階順に並べられた笛に空気が吹き込まれ発音する仕掛けをもった楽器で、この「笛ハープ」はもっぱらハープを奏でる当時の吟遊詩人達が演奏していたものだという。また、ハープに準じて、様々な音階に調律されたものや、広い音域を持ったもの、さらには2台の「笛ハープ」を並べて両手で別々に演奏できるものまで作られていたことが当時の記録として残されている。興味深いことに、現在のハープのように7音音階に調律された「笛ハープ」はしかし、ほとんどの場合その中の6音しか用いられることはなかった。つまり各オクターブに存在する残りの1音は鍵盤が固定されていたり、笛が用意されていなかったり、その鍵盤だけ奇妙な装飾が施されていたりと、他の音と同様に使われた形跡がない。それは後に「悪魔の音程」と呼ばれる7音音階に宿命的に現れる増4度音程の出現を避けるためだったというのが今日の定説である。

　この「笛ハープ」でどのような音楽が奏でられていたのかはまったく不明だがこの楽器を用いた「四指繰り講」あるいは「指繰り講」と呼ばれる占いのようなものが一時期、民衆の間で盛んに行われていたという資料が見つかったことで多くの謎が解明されつつある。なぜなら発見されたこの「指繰り講」の記述に従うならば、まったく残されていない(あるいはそもそも作られなかった)楽譜などによらずとも、この楽器でどのようなことが行われたのかを知ることが出来るからである。

「四指繰り講」は、ハープの演奏に似て小指を使わず、両手の親指と薬指の4本の指だけを用い、右薬(指)と左薬(指)、左薬と左親、左親と右親、右親と右薬、そして再び右薬と左薬の順に「指繰り」と呼ばれる計算を行いながら音を紡ぎ出していく術(演奏技法)である。この「指繰り」の術は、先に述べたように各オクターブ内の決して使われない鍵盤を起点番号0として隣り合わせた鍵盤順に1から6まで番号を与え、2音の組(右薬と左薬、など)の鍵盤の番号を掛け合わせ、その答えを7で割った余りを新しい音として順番に変化させていく技法である。つまり、右薬と左薬が2と6ならば、(2×6)%7=5となり、左薬は6から5に変化し、次の左薬と左親の「指繰り」はこの左薬の5とその時に置かれている左親の番号で行うという具合である。

　このような「演奏」がなぜ民衆の間で広まったのかもまた謎だが、右手と左手の状態や音程関係、つまり和音の響きやその変化を神託とするある種の占いだった考えられている。残された資料には、右手に男の、左手に女の誕生日の星座や曜日を二組の6までの数として初期値(「考案」と呼ばれる)に換算する方法が記されており、この初期値に戻るまでの「演奏」の長さや戻ったときの指の配置などから男女の相性や将来を密かに占ったのだという。

　なお、現在ではこの「指繰り」によって行われる4つの数(＝音)の変化は多くの場合239ステップで初期状態に戻り、場合によっては非常に限定された音による十数ステップで反復するものなども知られている。また先の「弾かれない1音」0を使うならば、0のかけ算を行うので4音の変化はすぐにすべて0に収束してしまうことは言うまでもない。

という夢をみた。

三輪眞弘

1958年東京に生まれる。
1974年都立国立高校入学以来友人と共に結成したロックバンドを中心に音楽活動を始め1978年渡独。国立ベルリン芸術大学で作曲をイサン・ユンに、1985年より国立ロベルト・シューマン音楽大学でギュンター・ベッカーに師事する。1985年ハムバッヒャー国際作曲コンクール(ドイツ)佳作、1989年第10回入野賞第1位、1991年「今日の音楽・作曲賞」第2位、1992年第14回ルイジ・ルッソロ国際音楽コンクール(イタリア)第1位、1995年村松賞新人賞、2004年芥川作曲賞などを受賞。著書「コンピュータ・エイジの音楽理論」、オペラ「新しい時代」、インスタレーション作品「またりさま人形」、作品集CD「赤ずきんちゃん伴奏器」、「東の唄」、「昇天する世紀末音楽」シリーズ、「新しい時代信徒歌曲集」「言葉の影、またはアレルヤ」などを発表し、多岐に渡る活動を続ける。
IAMAS(岐阜県立情報科学芸術大学院大学)教授。

岩崎孝昭 (ELX-1m)

1979年1月生まれ 。
10歳よりエレクトーンを、15歳よりピアノを始め、滝山真理子、松本淳一、平部やよい、森下絹代、各氏に師事。1997年、国立音楽大学音楽学部応用演奏学科に入学。在学中の2000年、2001年にリサイタルを行う。2000年に開催された「第12回全日本電子楽器教育研究会電子オルガン新人演奏会」に大学代表として出演。国立音楽大学卒業演奏会に出演し、矢田部賞受賞。インターナショナルエレクトーンコンクール2003(B部門/クラシック系音楽対象)で第1位を受賞。

桑原哲章 (ELX-1m)

洗足学園音楽大学電子オルガン科卒業。同大学院終了。
電子オルガンを菊地雅春、赤塚博美、加曽利康之の各氏に師事。大学在学中よりオペラ、合唱伴奏、現代曲初演等数多く手掛ける。第35回全国身体障害者スポーツ大会「ハートフルくまもと」開会式において演奏。また「さとうきび畑」コンサートに参加。02年には沖縄平和祈念堂、03年には人見記念講堂に出演。第13回くるめ新人演奏会出演。九州音楽コンクール電子オルガン部門審査員特別賞受賞。
洗足学園音楽大学講師。

Orfeu mix
- for electronic organ ,electric guitar and electronic sound

electronic organ(電子の器官/機関)。
　録音・加工・変調されたelectric guitarのサウンドを中心素材とした電子音響との、フラグメンタルな関係。

『あるべき場所も知らないまま、われらは実在の連関によって行為する。
アンテナはアンテナを感じ、空虚な距離が支えた.....。』
(リルケ/「オルフェウスへのソネット/3」)

過去のものと未来のものがシンクロした瞬間。非・連続的なもの、偶然に重なりあった、別々の場所と時代のもの、重なりあう2つの現実....。中世の吟遊詩人の歌と重なりあう、エレクトロニカサウンド。

　もうひとつの隠されたテーマ、< Body >< Dance >。
身体イメージ。分断された身体。器官。オルフェの被った身体分断という運命。
断片というかたちで世界から剥奪されてきた音響の数々。

『時間は存在しない。時間とは夢見られるものである』

失われ、傷ついた受難の身体イメージ。残像として、空間に残る身体イメージ。
断片化されたものから、あらたな像を予兆として結ぶ。
浮遊し、たえず在る、無数の情報としての身体イメージが、なんらかのはたらきかけにより実在した一瞬。

Orfeu神話に託した、< Distant Love >。

宮木朝子

東京都立芸術高等学校音楽科ピアノ専攻、桐朋学園大学音楽学部、同大学研究科作曲専攻修了。
IRCAM Academyd'ete,INA-GRMなどにて作曲、電子音楽を学ぶ。現音作曲新人賞、秋吉台国際作曲賞などに入選。現代音楽の文脈からゆるやかに逸脱しつつ音響空間について思考する試みを、大学在学中より都内の小劇場にて開始する。映像、ダンスとのコラボレーション、インスタレーションなどの活動を行い、ミラノ「Il gialdino dellamusica(1999)」東京「新しい世代の芸術祭」などで上演される一方、内外の演奏家の委嘱による作曲活動も行い、ドイツ、イタリア各地、ロンドン「Japan Festival 2001」などにて演奏される。2003年秋、沖永良部島にて巡礼野外劇<南海のオルフェウス>(総合ディレクション・今福龍太)音楽監督。酒造工場、鍾乳洞の中にてサウンドインスタレーションを行う。洗足学園音楽大学音楽音響デザインコース非常勤講師。
活動予定:11/28 art live [sound + dance + visual] vol.5(BankART 馬車道ホール)/国立天文台4次元デジタル宇宙プロジェクト音楽音響協力

平沼有梨 (作編曲・ELX-1m)

京都府京都市出身　相愛大学音楽学部卒業
4歳から音楽を始める。大学在学中より全国各地でコンサート活動開始。ヨーロッパ各地・アメリカ合衆国・東南アジアなど海外コンサート・ツアーは多数に及ぶ。
ライブ活動の他、CM・ドラマやメーカーのプレス発表・2005年愛知万博などイヴェント・式典等の音楽制作でもその才能を発揮している。'02年には、1st.アルバム「Tears~mohitotsu-no-namida~」をリリース。ゲストにかの香織を迎え、アルバム発売記念ライブ「Tears Live」を京都・東京で開催。ジャンルや国境を飛び越え、究極の叙情性と対極のキッチュさをかねそなえた感性をフルに生かし、現在精力的に活動中。
Official Web Site　http://www.q-ism.com/yurihiranuma/

及川潤耶 (エレクトリック・ギター)

1983年宮城県生まれ。
5歳よりピアノを始め、多田真一、福原圭三、狩野宗一各氏に師事。14歳よりエレキギターを独学、バンド活動を開始。18歳より作曲法(和声・コンピュータ音楽等)を独学、及び狩野宗一氏に師事。
2000年12月よりインディーズバンドLuinspearのサポートギターを担当。CD「闇と月」に参加。2004年日本クラウンより発売の「CANNONBALL vol.1」参加バンドze零roのピアノ編曲担当。
現在、洗足学園音楽大学音楽音響デザインコース2年在学中。洗足学園音楽大学80周年記念事業<サウンド・クリエイターズ・フェスタ2004>において作曲家の吉田孝二氏とのコラボレーション作品を発表。作曲を西岡龍彦、狩野宗一各氏に師事。その独自のサウンドは「緻密な空気のような透明感」「時代性に対する鋭敏な感覚を持ちつつ自らの感性に忠実な音」とも評される。

事務局より

2002年8月、全日本電子楽器教育研究会シンポジウムの基調講演の中で、作曲家／西村朗氏により提案された「作曲家の為のエレクトーンマニュアル」が2003年12月に完成。
同月、全日本電子楽器教育研究会主催 第38回ワークショップにて紹介されました。

今回、この「作曲家の為のエレクトーンマニュアル」を切っ掛けに、日本電子音楽協会とのコラボレーションとして三輪眞弘氏を初めとした5名の作曲家の方々による作品展を開催の運びとなり、大変嬉しく思います。
また、桑原、安井、岩崎の若手エレクトーン奏者にも参加頂き、有意義な企画となりました。これを機に、エレクトーンという楽器が改めて認識され、益々音楽活動の輪が拡がることを願っております。

全日本電子楽器教育研究会 事務局長 森完次

毎年定例として行ってきた日本電子音楽協会の演奏会ですが、11回目にして始めて本格的な共催企画となりました。
今までも何回かテーマ性を持った催しはありましたが、今回は『電子オルガン三題噺』と称し、一つの楽器をど～んと中心にすえ、5人の作曲家がそれぞれのお題を持って取り組みました。

共催の大きな意図として「作曲家の為のエレクトーンマニュアル」を実際に使ってみる、ということがありました。今回の作曲家には、エレクトーン演奏経験のある者もいれば、全く始めて立ち向かうという者もおります。そういった者にとって、この「マニュアル」がどういった点で、どの程度有効であったか、という、ほんの一例ではありますが、実践例としての報告ができたのではと思っております。

5人の作曲家にとって、電子オルガンという楽器がどういうものであったか、ということは各人各様だと思いますが、電子オルガンの世界に、少しでも新しい風を感じていただけたなら、それにまさる喜びはありません。

日本電子音楽協会 事務局長 岩崎真